エタノールとスウェーデン

森林化学研究室
鮫島正浩教授
Masahiro Samejima

Epiphanies
その瞬間

No.5

私の家は三代続く研究者の家系です。母方の祖父は京大で発酵工学を学び、貧しかったためすぐに社会に出て、のちに起業しました。父は京大で農芸化学を学び、祖父の会社に勤めたのですが、そこで母と知り合って結婚しました。私が1才から3才まで父は米国留学中でしたので、幼い頃の父の記憶はほとんどありません。むしろ祖父母に育てられた印象が強いです。

博士課程に進もうかどうしようか迷っていたとき、背中を押してくれたのはこの祖父でした。両親は就職を期待していたようですが、ある日、夕食の席で祖父が「自分は残りたくても大学に残れなかった。今は貧しくもないのだから、一人くらい大学に残っても良いのではないか」と独り言のようにつぶやいて、それで決まりとなりました。

大学では研究対象に木材を選びました。森や山が好きだったことと、祖父や父と違うところに自分の世界を築きたかったからです。ところが、宿命と言うべきか、二人が歩いた道に私も引き寄せられました。祖父は第二次世界大戦中、航空機燃料としてのエタノール生産をやっており、父はオイルショックの直後の1980年代、原油の代替燃料としてエタノール生産の開発事業に携わっていたのです。

私は木材をはじめとするセルロース系バイオマスの研究から発展して、2000年代初頭からは再生可能エネルギーとしてのエタノール製造のための研究に従事するようになり、プラント実証まで関わることになりました。結局、三代続けてエタノールと向かい合うことになったのです。

現在の私の研究は、バイオマス分野でのバイオテクノロジー導入の第一人者、スウェーデン人のカール・エリック・エリクソン教授から学んだものが原点となっています。教授に初めて会ったのは1980年頃、視察で東大に来られたときのことでした。以来、国際学会で度々お目にかかり、米国ジョージア大学で教授が研究室を創立された際に助っ人として駆けつけ、交流が深まりました。

私は10年前に長野に移住し、休日には近くの森や山を散策する生活を送っていますが、こういう暮らし方は教授をはじめスウェーデン人から学んだものです。そのほかにもたくさんのことを教えてもらった教授なのですが、残念なことに2008年、脳腫瘍で急逝されてしまいました。このときは大変なショックでしたが、教授から引き継いだ学問を、次の世代に伝えていきたいという思いを強める原点ともなりました。

1956年夏、2歳の私と祖父、渋谷区の自宅で。

2006年9月14日、エリクソン先生とともに、スウェーデン・ストックホルム近郊で。